
夢はでっかく全国展開、かなあ

ヘイハチロウ = 忠カチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢はでっかく全国展開、かなあ

【Nコード】

N0022U

【作者名】

ヘイ八チロウ＝忠力チ

【あらすじ】

俺は事故で死んでしまった。しかし、それは神様の間違えだった。生き返らせろって文句を言ったら、ものすごい笑顔で【ムリ】と言われ、殺そうと思った
でも、転生ならOKって言われたのでやってもらうことにした

大丈夫かなあ

反省会とお詫び (まだの人)

作者です

先ずはじめに・・・

みなさん、すいませんでした

感想等で、様々なご指摘がありますが、それだけでも感謝です

本当にありがとうございます

煙管の件ですが、自分が好きな漫画でよく出てきたので、そっちの方がカッコいいかなあと思い描きました
実際、自分でも解ってたんですが(この辺はたちが悪く、詰めの甘い所)、どうもうまく纏まらず、この件がおざなりというか、流れで行ってました
決して料理を馬鹿にしているわけではありません、自分もよくするの
で解ってるつもりです

作品の中で、なんとかやめる方向にしていきますので、なにとぞご理解の程を宜しく願います

そして、料理等の組み合わせの件ですが・・・

こちらは、自分の含め知り合い等に聞き込んでから書いて行きますので、『これはちょっと・・・』等

と思うかもしれませんが、成るべく変なのは避けて行こうと思います
こちらにも、なにとぞご理解の程宜しくお願いします

長くなりましたが、誤字等も目立つので読みにくいとは思いますが

なんとか頑張つて書いて行きますので、今後とも宜しくお願いします

新転地

SIDE:???

「ここが陳留かぁ、結構賑わってんなぁ。」
大型の屋台を引きながら、大通りを歩いて行く

人々は笑い、品物も豊富。商売にはもってこい環境だ、久々の腕の見せ所だな

今思えば今までの場所は酷かった……
袁紹のときは、人がコネエコネエ、たった一週間で断念。まあ、何人かの武官、文官と知り合えたからいいけど

袁術のときは、とにかく物価がたけえたけえ、三日ともたなかったよ。上物の蜂蜜が手に入ったのが唯一よかったことかなあ

まあ、いずれにしろ金にはならなかった。……
……最悪だよ

「意外と良い場所ゲットしたな。人の目にも付きやすいし、大通りも近い、サイコーだな
さあ、開店開店！　　意らしゃーい！、いらしゃーい！、」

さっきまで啜えてた煙管の火を消し、呼び込みを始める

此処から始まる、俺の新生活。楽しく出来たら良いなあ

新転地（後書き）

主人公：姓・臧 名・霸 字・宣高 真名：軍侍^{ケンシ}

旧姓：結城 軍侍

特技：料理 野菜の皮剥き 日曜大工 武術を少々 薬術

好きなもの：残さず食べる奴 包丁 煙管

嫌いなもの：出した飯を残す奴（事情による）

駄文ながらも宜しく願います

夏、迫る

SIDE：軍侍

皿を洗い、包丁を磨き整える

やっぱり良い包丁だ、さすが神様。なんでも天界でも有名な刀匠に頼んでくれたらしい

言ってみるもんだ

「やってるかい？」

「へい、いらっしやい！！ どうぞ」

客を誘導し、お茶、お絞りを渡す。最初はお絞りの説明もめんどくさかったなあ

「何にしましょう？」

ウチのメニューは、
・飯
・漬物の盛り合わせ
・汁物
・酒
・
野菜の盛り合わせ
のみ

後は……………

「今日は、チャーハンと野菜炒めにしようかな」

「ハイ、よろこんでー！！」

「どうぞ、突き出しです」

というと、小鉢に乗った漬物を出す

因み

に今日は茄子の浅漬け

客にリクエストを聞いて、作れるなら作る（まあ、大体作れるんだけど）

「おっ、今日はアタリだね」

気に入ってくれてるようだ、うれしいねえ

「そいつは、なによりで」

そう会話をしながら、注文の品を作っていく。

「ごちそうさまでしたー、また来るよ」

「ありがとうございます。またいらしてください」

客が笑顔で帰っていく。いいねえ、冥利につきるたあこの瞬間だねえ
すぐに机の掃除と皿洗いを済まし終わると、休憩タイムに相棒を口
に啜え、火をつける

.....

「いいね」

そろそろランチタイムも終わりを向かえ、片付けにてをかけた時。
それは突然やってきた

S I D E O U T

S I D E : ? ? ? ?

わたしは今非常に悩んでいる。とゆうのも、我が主のことで困った事になっているのだ

「はあ、華淋様が最近元気がない。どうしたものか」

今思うと当然と言えば当然である。というのも、領地を任せられてから多忙も多忙。とても休んではいられない

しかし、御身の事も考えて欲しい

「ええい！何も思いつく『グー』っう．．．、とりあえず何かたべよう、腹が減っていたら思いつくものも思いつかん」

食べる所を探し始める、すると．．．．．

「將軍、何かお探しですか？」

警邏をしていた兵が近付いてきた

「昼食をとろうと思うのだが、良い場所はないか？」

「それなら良い所がありますよ」

わたしは教えてもらった場所に向かった

S I D E : 軍侍

煙管を吸い終わり、包丁を磨いていると

「おい、たのもう!」

「へ?」

それが彼女たちとの出会いであった

ストレスの原因になるとも知らずに

夏、迫る（後書き）

反省会

はい、2話目ですめ

わざわざ????にする必要なるのかとおもいますが、一応というこ
とで はい

女性のしゃべり方ってむずかしいですね

今回出てきた、食べ物は『漬物』ですね

おいしいですよね漬物。市販で買うと当たり外れがありますけど、
自分で作ると愛着があっついていいですよ

自分浅漬けもいいけど、柴漬けもサイコーですね。細かく刻んで、
漬け汁と一緒にタマゴかけご飯にかけると、もう絶品ですね

みなさんはどうですか？

でわっ話目でもたお会いしましょう

さらに、夏、迫る

SIDE：軍侍

な、な、何だあ？ 少しばかりあっけにとられたが、ふと我に返って

「たのもうって、お客さん。決闘しにきたんじゃないんですから

「おおっ、そうだな。すまん

「いえいえ、とんでもない。で、お食事ですか？」

「あたりまえだ。屋台に来て、飯を食べないでどうする

「ですよ。では何にしましょうっ？」

仕切りのおし、ご注文を伺う

「そうだな………って、おい!!」

「はい？」

「これだけか、品は？」

やはり聞いてきたな。書こうかな、メニュー表。そっちの方が親切だよな

「品書きにはこれだけですけど、食べたい物を言ってください。

知ってるもので作れるものなら作ります。何にしましょう?」

「そうだな、マーボー豆腐とチャーハンにしよう、たのむ」

「はい、よろこんで! 　どうぞ、突き出しになります」

今回は小鉢に野菜の盛り合わせ、いわゆるサラダを目の前に出した

「んっ、こんなもの頼んでないぞ?」

「これは注文の品が来るまでの【つなぎ】ですから、タダですよ」

そうか　といい食べ始める。表情を見る限り、気に入ってくれている様だ。　上々、上々

「はい、ご注文の品です」

「いただくか………、はあ」

「とっと」「こけそうになる、食べながらため息って

「お客様、なにか不手際でも？」

「いや、何でもない。こっちの事だ、気にするな」

「そうはいつでもですよ、そんな暗い顔をしながら食べてたら美味しいモンも美味しくないでしょう」

「むう」

「まあ、話してみてくださいよ。屋台の店長でも手助け出来るかもしれませんよ？」

「……………わかった。実は……………」

「なるほど、上司が元気が無いと。」

色々大変なんですねえ

「どうしたのかこまへ」おい、姉者！「んっ、おお！秋蘭！！」

「昼食か？なら私もいたどころ」

青髪の女性が客に話し掛け、席に座る

へえ、ものすげえ美人姉妹もいたもんだ 誰なんだろう？

それにしても綺麗だ うん、綺麗だ。 とりあえず二回言っておこう

後から来た妹さんに同じ説明をし、調理を始める

「華淋様はどうだ？」

「先ほど、医者に診てもらった。なんでも血が足りないらしい」

ほうほう、貧

血ですか、大変ねえ

「血が!?!」

まあ、この時

代じゃ大事だよな

「どうするのだ!?!」

「こればかりは私でも解りかねる」

悩んでますね

え。そろそろかな

「お客さん、出来ましたよ」 品を出していく

「すまん、いただきます。……っつ!?!美味い、美味しいぞ
店主よ」

バンバンジーを一口食べて、言っつて貰えた 高評価だ!?! ツ

シ!?!小さくガツツポーズ

「ところで、お客さん達の上司は血が足りないって?」

煙管に火をつけ、聞いてみる

「ああ、それがどうした?」

「それは多分、貧血って奴ですな」

「ひ、ひんけつ？」

「ええ、心の蔵が強く打つたり、めまいが出たり、たまにボオーつとするんじゃないんですか？」

後、目の下が白くなってたりしませんか？」

「なっ！どうしてそれを！？」 姉の方が何処からとも無く、大剣を出して来た

「ちよっ！！」

「姉者！……！」

妹さんが止めてくれる

あぶねえー

「で、店主よ、治し方知っているのか？」
「だなぁ、本当に姉妹か？」

この妹さん冷静

汗を拭きつつ

「そうですねえ、例えば海藻類とかですね。昆布やワカメなどを取るとういとおもいますよ」

「昆布は出汁を採るので知っているが、ワカメとは？」

「こいつですよ」

と言い、お椀に味噌汁をよそいで出す

「汁の中に入っている黒いのがワカメです」

二人とも味噌汁を見ている。まあ、めずらしいだろうねえ

あっ、そうだ

「あの一、お二人さん。提案があるんですけど……」

「んっ、なんだ？」

おお！ハモった！！ やっぱり姉妹だ！！！！

「自分に料理を作らせてくれませんか？」

「は??？」

「お話を聞いていて、お二人の上司に対する思いに感銘をしました
是非、自分にやらせてもらえませんか？お願い申し上げます」

ピッタリ角度120度で、頭を下げた

「……………」

沈黙の時間がながれる、ダメか？　ダメなのか！？

「秋蘭」

「なんだ、姉者？」

「私はこの者に決めたぞ」

「フフツ、姉者が決めたのなら、私がかまわんよ」

シャアア！！！！

！　今回は大きくガッツポーズ

「よしっ！！おい、店主！！　名は！！？」

「はいっ！　姓は臧　名は霸　字は宣高と申します。改めて宜しく
お願いします！！！！！！！！」

俺のうでが何処までやれるか解らんが、やってやるぜー！！！！！！

マ、マ、マジでかつ!! 超大物じゃん

し、しし、しかも女性って

ど

うなっとなんじゃ——!!——!!

さらに、夏、迫る（後書き）

反省会

はい、3話目ですね

此処から主人公の苦行が始まって行きます
お楽しみにして下さい

御見苦しいとは思いますが宜しく願います

今回出て来た品は『サラダ』『チャーハン』『バンバンジー』『味
噌汁』ですね

コレだけ出てきたら、ちょっとした定食です はい。

では今度は4話目でお会いしましょう

夏に挟まれる。そして、接近遭遇

SIDE：軍侍

今、俺は非常に後悔し、焦っている

「どうしたものかなあー」

道の真ん中で頭を抱え、膝を抱える

「ジヤマだよ！！！！！！！」

荷車を引くおっちゃんに怒られる、あたりまえだよな？交通の邪魔してるよね はい、どけます

回想

「あのー、お二人の上司ってもしかして……………」
「…曹孟徳？」

「キサマ！華淋様を呼び捨てにしたな！！？」

だから、不

用に剣を振り回すなよ！！！！

「はあ、姉者、そこまでだ」

やれやれじゃねあーよ、妹さ

ん この人、いつもこうなのか？

「秋蘭が言うなら。臧覇よ、この町の領主である華琳様に出すのだ、不味い物を出すと言う事は解っているだろうな!？」

もしそのようなことがあれば……………」

ジャキンツ!!!!!!!!!!

構えるな、構えるな!!

つうーか、鼻先当たってる!!!!!!!!!!

「姉者、当たってるぞ。それと、そお脅すな。

まあ、そお重責に思わず、いつも通りに作ってくれば良いさ」

この人は良い人だよ「華琳様は味にはうるさいからな。そこは知つといてくれ」、なんでそんなお土産をおいていつてくれるかなあ……………はあ

回想END

「まあ、うじうじしててもしゃーねえ! 《アソコ》に行けば、何かあるだろう」

俺は気合を入れて、相棒に火をつけ、歩を進める。例の場所に向かって

その場所とは、此処陳留でもめずらしい、いわゆるスラム街のような場所の入口近くの路地のおくーの方にある店。初日に散策中に見つけたのだが……

「大将、やってるかい？」

戸を明ける。すると、『カラン』と音が鳴る

「いらしゃい」 不愛想げに返事をしてくる まったくこの人は

「良いものはあるかい？」

「また、あんたか。物好きだねえ、わざわざこんな辛気臭いトコロに通うなんて」

嫌そ

うに言うなよ。本当は嬉しいくせに

「まあまあ、そお言わず。で、珍しいもんはいつてるかい？」

「はあ。こつちきなよ、入ってるからさ」

ため息ってどう

なのよ！？ 失礼じゃあないかい？

奥に入っていく店長を追いかけ、ついて行く

此処は店長の趣味かなんなのか知らないが、あるとあやゆる珍しい

食材を取り扱ってる。

「コイツだよ。亀のようだな。池で見つけてで飼ってたらしいが、奥さんが気味悪がって捨てようとした所を貰って来た。まあ、不味そうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は心底驚いていた。目の前で動いてる生き物に

「あんたでも押し黙るほど」「いくら？」「何だっつて？」

「だから幾らかって。こいつを買うよ、まだある？」

「ソイツと合わせて二匹だ」

「全部買つよ。それと鳥の臓物といつもの香辛料を頼む」

SIDE：店長

急に真剣な顔し始める

なんだ？

そんなに気になるのか、この亀が。何なんだ

そして、二匹とも買うという。いよいよ何なんだ、おまえは？

この亀もどきと目が合い、心の中で聞いてみた

「なあダンナ、こいつは何なんだい？」

「こいつはな、【すっぱん】っていう生き物だよ。亀の遠い親戚かな」

SIDE：軍侍

俺は水を張った桶にすっぱんを入れ、香辛料と他の食材を受け取り、扉の方に向かう

「大将、偶にはたべにきてよ？」

「はいはい」と言い、顔をこちらに向けず手だけ振って挨拶する
まったく、失礼じゃあないかい？

戸を開け、出て行くようにすると……

ド
ン……

「きゃっ……!?!」

「おおーっ……!?!?!」

こけそうになるが、何とか押し留まる

誰かとぶつかったようだ

「大丈夫かい？」

「ええ、なんともないわ」

「じゃあ、悪いね。ちょっとくば急ぐよ」

「ちょっとまち」………

何か言ってたよつだが、こんなレアモノと出会った今の俺にとちやあ気にするところでは無い

急いで帰らねば。まってるよ、すっぱんちゃん。おいしく調理してやるからな

そして、まってるよ曹孟徳！！ 俺の料理でギャフンといわせてやる

そう思い、足取り軽く走っていく。

………

後に後悔するとも知らずに………

夏に挟まれる。そして、接近遭遇（後書き）

反省会

はい、4話目です

今回は料理は出てきませんでしたが、食材として【すっぽん】ができました

この時代にすっぽんがいたのかは解りませんが……

すっぽんは本当に女性の味方ですね。

食べると、元気になるし、お肌にもテキメン　今流行のコラーゲンを多く含んでいます

さらにもう一品作る予定です

お楽しみにしてください

次回5話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しく願います

夏との決闘 その前に下準備

SIDE：軍侍

「女将さん、今帰った」

俺は宿泊している宿に帰ってきた

「宣ちゃん、おかえり。今日はどうだったかい？」

俺のことを『宣ちゃん』と呼ぶこの人は、この宿の女主人で、この町でのお客第一号である

飯を食い終わった後で、改まって『ウチへ泊まりな』と言われ、新
手の恐喝か！？と思いきや

『アンタの料理にほれたよ、ウチに来な！』といわれ、今も泊ま
らしてもらっている

「今日も沢山鍋を振ってきた」

「そいつは良いことだ」

軽い雑談を交わし、持って帰ってきた材料を見せて

「また、鍋借りても良いかい？」

「良いよ、好きに使いな。でも、分かってるだろうっねえ？」

「はいはい、わかってるよ。片付けはしっかりとだろ」

「よろしいー!」

と言い、女将さんは奥に引っ込んでいく

「ふうー。明日は早えーぞ。もう寝るか」

明日は夏候姉妹がくる日だ
.寝れるかなあ?

今日は早く起き、仕込みを始める

タオルを頭に巻いて、白衣に着替える 顔を叩いて、気合を入れる

この辺から《キューオー、3分クッキング》のテーマ
ソングが流れてます

まずは一品目：すっぽん鍋

最初にすっぽんを捌いていく。すると

甲羅上下が2枚・足つきの切り身4枚・頭 を残していく

鍋を二つ用意し、1つに水を入れ、沸かしていく。沸いてきたら切り身を入れ、煮ていく

その後、水洗いしていく

2つ目の鍋に新たに水を張り、切り身、乾燥昆布、そして臭味消しの酒を入れる（この時、細めに灰汁を丁寧に取りっていく）

少し煮ると、自家製醤油、塩、みりん、が無いのもう少し酒を加えて、大体2時間程煮ていく（因みに煮れば煮るほどOK！）

ゼラチン質の部分が柔らかくなるまで強火を決め込む

柔らかくなったら、火を弱くして、野菜（豆腐、白ねぎ、人参、白菜、椎茸）を投入していく

さじで確認し美味しく出汁が出たら、出来上がり！ 完成です！
！！！！！！

付けタレ

に自家製のポン酢もどきを添えて

二品目：トリモツ煮

鍋ですっぽんを煮ているときに、作っていきます

まず、用意するのは……………

レバー、砂肝、はつ（余分な所を切り落とす）

きんかん（特になし）

鍋の中に醤油、砂糖（貴重品だけど使う）をいれ、煮たさせる（強火）

最中に汁がトロミが出てきたら、酒や水で延ばしていく

泡が立ち、沸いてきたら、もつを入れ、少し混ぜ、蓋をして見ていく（泡が立ってきたら、混ぜながら様子を見る） 焦げやすいので注意

最後にタレともつをしっかり絡めていき（鍋の淵にも付いているので残さず）、皿に盛れば完成！！

「ふうー、つつい本気を出してしまったな」

「何に本気を出したんだ？」

「うひょひょい！！ なんだよ、お二人さんか。びっくりさせないでくれよ」

秋「ふふ、すまない」

春「この程度で驚きおって」

「で、どうだ？」

「まあ、やれる事はやった。後は神のみぞ知るところだな。
気になるなら食べてくかい？」

「姉者、どうする？」 「当然だ！」

・ ・ ・ ・ ・

S I D E : 秋 蘭

春、秋「……………」 「」

私達は臧覇から鍋二つを受け取り、華琳様の下へ向かっていた
姉者はもちろん、私もしゃべる事が出来なかった
そうこうしていくと、華琳さまの部屋の前に着き、入っていく

「お帰りなさい、2人とも。で、どうだったのかしら？」

春、秋「……………」

SIDE：華琳

「どうしたのかしら、ふたりとも？」

2人の様子がおかしい、そう例えるなら何かに打ちのめされた様な感じを受ける

「華琳様」

「なにかしら、秋蘭？」

いつも冷静な彼女が、意を決したように話し始める

「覚悟して、食べてください」

は？何を言ってるの？ たかが屋台の店主が作った料理で覚悟しろなんて

でも…………

「あなたがそういうのなら。いいわ、いただきますしよ」

私は後悔することになる

【たかが】

そのような言葉を使った自分に

夏との決闘 その前に下準備（後書き）

反省会

はい、5話目です

姉妹の反応は次で華淋様と一緒に視ていきます

今回出て来た料理は【すっぱん鍋】【トリモツ煮】ですね

トリモツ煮は感想の中に「幾夜さん」が【レバー】でも良いと書いていただいたので、どうせなら最近自分がハマっている【甲府とりもつ煮】を作らせようと思いました

B-1グランプリ以降、自分の住んでいるトコでもスーパー等で見かけるようになり

自分でも作り、サイコーにご飯が進みます

幸せです

次は6話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しく願います

決闘の最中、猫を助ける？

SIDE：軍侍

ランチタイムをきりぬけ、人通りも疎らな道を眺めつつ煙管を吹かしながら、ただ今休憩中………

フウーーーーー

「今頃喰ってんのかなあ？　今回は、結構本気だったからな
まあ、なるようになるよな」

吸い終わり煙管のケースにしまい、汁の調整をしようと鍋の前にたつた時だった

「な、なんだあ!？」

珍妙なものをいた、いや、倒れていた………
どうする、オレ!!!??

SIDE：華琳

秋「二品ありますが、まず一品目です」

私の前に器が置かれる。中身は黒い汁の中に、茶色い物がゴロゴロ入っている

見た目は非常にアレだけど、何とも言えない香りが漂う

いわゆる、『食を誘う香り』
最近疲れているせいか食事が美味しそうに見えなくなっていたが料理の香り一つだけで、このような気持ちになることなんて、いっぶりかしら

「でわ、いただきますよう」

一口食べてみる・・・っ！！！

口の中で具材がほろほろと崩れていく、そして煮込んだであるタレが甘辛く、丁度良い濃さをしている

もう一口、今度は食感が違う　こりこりとしているが、柔らかくタレが中まで染みている

春「華琳様、コレを上に乗せて召し上がってください」

春蘭はそう言うと、あるものに乗せていく　『刻んだ生姜』

また一口・・・っ！！！！！！！

生姜の威力は絶大だった。タレの味の中に生姜のピリツ！とした味が更に箸が進む呼び水となる

「秋蘭、すまないけどごっ！ご飯がほしくなりましたか？・・・なぜ？」

「私もそうしたからです。もちろん、姉者もですが」

春蘭も頷き、ご飯をよそって私に渡してくる

「ご飯と食べても美味しい。タレ自体がご飯単体の味に合わせつつくるように馴染んでいく」

秋「この料理は『鳥のモツ煮』といいまして、鳥の内臓を使用しています」

華淋様は血が足りないと診断されました。故に肝の臓の部分を使う事で、足りないものを補う。

更に生姜を加える事で体の働きを活発にしてくれる作用が有るそうです。現に体が温まった感じが

しませんか？

因みに肝の蔵は新鮮なものであれば、生での食べれるそうです」

確かにコレを食べてから、体の奥に熱を感じている。生姜のせいだったのね

「驚いたわ、このような料理があるなんて。秋蘭、あなたの言った意味が解ったわ」

秋蘭は首を横に振り、言う

「まだまだです、コレは序の口です。此処からが本番です」

何ですって、コレがまだ前菜だというの！！？？

「姉者、頼む」「うむ！ー！」

秋蘭が皿を片付け、春蘭が二品目を運んでくる

鍋のようね、中身は何かしら？

春「『すっぱん鍋』です」

??????

すっぱん?? 聞いた事無い名ね、何かしら？

「思うこと、ごもつともだと思えます。すっぱんは生き物の名前に
なります」

「ますますわからないわね、どういった生き物なの？」

「はい、店主がいうには亀の遠い親戚だそうです」

「か、亀？食べれるの？」

「私共も、最初は耳を疑いました。現に姉者が怒り、店主を斬りそ
うになりm」しゅ、秋蘭!？」

「はあ、何をやってるの？あなたは」
「うっっ、す、
すみません」

「いいわ、暖かい内に頂きましょう」

蓋を開けると、色とりどりの野菜がある中で………、足が在

それにしても、このすつぽんなる物。本当に珍妙ね

齒応えのある部分もさる事ながら、このプルプルした部分は何かしら？
気になるはね

秋「その部分についても聴いて参りました。

すつぽんは元気が無い時や疲れている時に食べる物、『滋養強壯』だそうです。人によっては血も 飲めるらしいです。そのまま飲むもの、酒と一緒にと、様々な食し方が在るそうです

また、華淋様が気になつてゐる部分には【こらーげん】なる物はいつてゐるそうです」

「こらーげん？初耳ね」

「はい、なんでもそれは人の肌に作用するらしく。そのこらーげんが含まれる物を定期的に取りすることで肌に艶やハリが出てくるそうです
それと、出汁と具を残しておいて下さい」

「へえー、すごいわね」

・
・
・
・
・

「でわ、最後の仕上げになりますので、しばらくお待ち下さい」

しばらくすると、春蘭達が帰ってきた鍋を置き、蓋を開ける

「これは、何？」

「【おじや】です。出汁の中にご飯を入れ、上から解き卵をかけて再び暖めたものです」

「またも驚いた。料理じたいは簡単なものなのにどうしてこんなに美味しいの
タマゴがまた、味がまるやかにする役割を果たしていて、とても気が利いている」

「ごちそうさま。春蘭、秋蘭、想像以上だったわ」

「はっ！恐悦至極でございます」「」

「このような料理を作ってくれた者はすぐにも呼び出したい。っ
と思っただけれど、そうはいかないわ」

秋「どうかしましたか？」

「体が火照ってしかたがないのよ？」

「二人とも！！！！！！！！」

春・秋「はいつ!!」

「今夜は激しくイクわよ……、覚悟しておいてちょうだい。
フフフフ……」

春・秋「御意!!!!!!!!」

礼を言わせてもらっわ、屋台の店主さん

こんなに気分が良いのは久しぶりよ?

49

うからあなたも覚悟しといてね

絶対に御礼を受けてもら

SIDE:軍侍

「へえーっ、しよい!! チクシヨオ」

風邪でも引いたかな？ゆうーて、寒ーしな　　ううー寒い、寒い

「コイツ、どうしようっ？」

屋台の上ですやすやとかわいい寝息たっている一人の少女

厄介なもの拾ったのでわ！

そんなことが頭をよぎるも、仕事の後の心地よい疲れに酔いつつ宿に帰る俺であった

決闘の最中、猫を助ける？（後書き）

反省会

はい、6話目です

今回は非常に書き疲れました
味の表現に苦勞、苦勞で大変ですよ

まあ、味に関して言えば人それぞれですから、そこんとこ宜しくお
願いします

さて、そろそろ時間を進めて行こうと思います

でわ、次7話目でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願ひします

助けた猫に怒られる・・・何故？そして、呼び出しをくわじ

SIDE:???

はっ!!

私は目を覚まし、あたりを見渡す

此処は何処だろう？ 宿だとは察するが、私は泊まった記憶が無い

「どうしてこんなところに？」

私が思考をめぐらしていると、いきおいよく戸が開く

「おおっ！起きたかい、お嬢ちゃん？」

「っ!!」

びっくりしたあ、急に大声ださないえでよ

「此処は何処ですか？」

「ここはあたしがやってる宿で、わたしは女将だよ」

「そうなんですか、ありがとうございます。でも、どうして私は此処に？」

「あんた覚えてないのかい？」

「はい。陳留についた事は覚えてるんですが、途中からの記憶が無いんです」

「そうかい。ウチの客がね、道で倒れてるアンタを拾って来たんだよ。」

『猫拾ったんだけど、どうしようか?』って、それで見てみたらアンタが宣ちゃんの背中にとってわけ」

猫ですって!!?失礼な。私の何処が猫なのよ、まったく

「そうですか?大変しつゝ“グウゝ”／／／／／／／／」

自重しなさいよ。こんな時に、よりもよって……恥ずかしい

「はっはっは!!宣ちゃんの言うとおりだね、まってな。今持ってきてやるから」

そう言うと女将さんは部屋から出て行った

「もぉゝ、どうしてこんな時に」

でも、確かにお腹は減っていた

あのバカ袁詔の所から直ぐに此処にやって来たものだから、最低限のものしか持って来なかったから金子もつきそうになって……
っ!!!

私、空腹で倒れたの!?!うそよ。なんてみつともない

「あんだ、大丈夫かい?」

「うわっ!!?!?」

気づいたら女将さんの顔が目の前にあり、ビククリしてしまった

「失礼な子だねゝゝ、折角ご飯をもってきてやったのに」

「すみません。でも私お金が無いんです」

「そうなのかい。まあ安心しな、これは宣ちゃんがあんたにとって作ったモノだから。」

安心して食べな、金なんか取らないよ」

「そうなんですか、ありがとうございます」

内心ホツとしながら、食器を受け取る イイ香りがする

「あたしは仕事があるから行くけど食器は厨房の入り口にでも置いていて」

「わかりました」

私は返事をする、食器の方に目をやる

鍋のようだが、蓋を開ける

フワァ〜っと、やさしいイイ香りが部屋中にたちこむ。美味しそう雑炊ね。タマゴとこれは鶏肉かしら、それと別に薬味としてねぎ、生姜

レンゲで掬い、別の器にいれ食べてみる

「おいしい・・・」

あっさりとした出汁にタマゴの絶妙な柔らかさ、そして鶏肉もご飯とタマゴの邪魔をせずとても食べやすい食感と味をしている
さらに薬味を加えると、またもや美味しくなってしまう

気づいたら鍋の中身を全て食べてしまった

「食器を返しにきました、ごちそうさまでした」

「おや、もういいのかい？」

「はい、大変美味しくいただきました」

「そうかい。それは宣ちゃんに言ってやりな」

「その宣ちゃんって人はどこにいけばあえますか？」

「今日は大通りのトコで開いてるって言ってたから行ってみなよ。

頭に白い布を巻いて、白い服を着ていて一心不乱に鍋を振ってる奴がいたら、その子が宣ちゃんだよ」

「わかりました、お世話になりました。ありがとうございます」

「あいよ、またきなよ」

別れの挨拶をすまし、宿を出て大通りを目指し歩いて行く

「どんな人があんな美味しい料理を作ったんだろう」

目的地に着き、私は目を疑った

女将さんが言った外見の人物を見つけたのだが……

【男】 だったのだ

「うそ・・・」

SIDE：軍侍

「ありがとうございます、またのお越しを！！はいっ、お待ちせ
しました飯、汁物が二つと野菜炒めが1つと魚の煮つけです」

「ほんとに言ったモンが出てきたよ」

「なっ？ いったろ。美味いから食べようぜ」

うん、いい笑顔だ。そして、いい食いつぶりだ、さすが兵隊さん
よく食う

「いいかしら？」

「へいっ！！いらしゃっ、おお！ アンタ、もういいのかい？」

「ええ、平気よ。それよりも世話になったわね、それと食事、美味
しかったわ」

「食べれたか、そいつは上々。ちょっと待っていてくれ、直ぐお茶を
出すから」

「ええ、お願い」

なにやら慌てた様に返事を返してくる、どした？

そんな事を考えつつ、お茶を出し、他の客をさばいていく

大体さばききり、ようやく話せる時間が空く

「まずは自己紹介だ。おれは臧覇、字は宣高、よろしくな」

「私は荀？、字は文ジャクよ」

ワァーオ、コイツはとんだ大物を拾っちまったよ

「マジかよ、王佐の才かよ」

「何か言っただかしら？」

「いいや！？なんでもないよ。気にすんなって」

「そうかしら？」「ジーーーーー」

ジト目で見てくる。怖い怖い、そんな目で見るとなよ、「こえーよ

」どうしてこの陳留に来たんだ？」

「なんでアンタにそんな事言わなきゃいけないのよ！」

そんなに怒る！？もしかして訳ありか？そいつはまずかったな

「悪い、無粋な事を聞いてしまったな。スマン」
とりあえず、頭を下げる

「わ、解ればいいのよ・・・」
許してもらえたようだ、よかったあゝ

「そういえば、曹操さんトコの人が文官募集の札を張り出すって言うたな

苟？もそれを聞きつけて来たのかなって思ったけど。違ったのかあ」

「それホント!!!!????」

ものすごい勢いで食いついてくる。なんだ職さがしかあゝ

「なんでも人手が足りなくて、睡眠が十分取れないぐらいらしいよ？」

「な、な、なんですって!!?!あの美しい曹操様がそのような事に早くお助けしなければ」

「おいおい、落ち着けよ。そんなんじゃ、受かるモンも受からんぜ」
血気盛んに行こうとするので慌ててとめる

「フー、フー、そうね。我ながら自分を見失ってたわ」

「あわてんぼうだねえゝ。おつ、そうだ。あんたの合格を祈願して・・・」

S I D E : 荀 ?

「あわてんぼうだねえ。おっ、そうだ。あんたの合格を祈願して・・・」

そんな事いい、男は料理を始めた

それにしてもこの男は何かしら？いつもの私ならさっさと礼をすまして、早く城に向かおうとするのだが、なにかしらこの感じ・・・引き込まれるって感じかしら？なにせよ男だからイヤなのに、何でもない駄話をしてしまう

そのような事を思っていると目の前に料理が出てくる

・・・・・・何かしらコレ？

S I D E : 軍侍

「おまちっ、カツ丼です」

なにやら摩訶不思議なものを見るような目で見ている

「何これ？」

「これは“カツ丼”っていう料理です」

「カツ丼？」

豚肉をあげたもの、細かく切った玉葱を少し濃い目の出汁に入れ、少し煮た後ときタマゴを回し掛ける。そうして、タマゴが少し固まってきたら小ドンブリにご飯をよそい、その上に掛ける
その上に三つ葉を乗せ・・たいけど無いので我慢する（因みにパン粉はただ今考案中なので、今回は天ぷら風にしています）

「へえ、変わった料理ね」

「試験に勝つ。“勝つ”と“カツ丼”・・・いかかですか!？」

そんな事はどうでもいいと言わんばかりに、無視をして彼女は食べ始める

なんかさあ、あるでしょう?なんかリアクションとろつよ。無表情を決め込まれたらさあよけいに惨めになるから

まあ、おいしそうに食べてくれている。女性だからかき込んで食べずに、丁寧に食べていてイトコの生まれというのが伝わってくる

「いいねえ、かわいいねえ」

「ちょっと、何視てんのよ?気持ちが悪い」

撤回。かわいくねえ

「ふう、ご馳走様。」

まあ、美味しかったわよ」

「左様でございますか」

「そろそろ行くわ。美味しかったからまた来てあげるわよ
それに採用試験に・・・カ、カッテ来るわよ」

「ぜひ、またのお越しを(ニコッ)」

「／／／／／／／／／／」

足早に去っていく彼女を見つめながら

「大丈夫だ。キミなら絶対に受かるから」っと呟く

その日の売り上げも、上々。店終いを始める、すると・・・

「もう店終いか？臧覇」

「んっ？おや、妙子さんじゃないか。どうしたんですまた？
あっ！？まさか、この前のことで何か」

「まあな」

そう言うと、真面目な顔をし竹巻を広げ言う

「『屋台店主・臧覇に命ずる。領主・曹孟徳様の命により、明日城
まで来られたし』だそうだ。」

ん？どうした、そんなすつとんきよな顔をして」

そりゃ、アンタ。

こんな顔にもなるだろうに

マズイって、マズイよ。どうする？

何が？何がいけなかった？

本気になりすぎて、調子に乗って何かミスったか

そんな事を考えてると

「つたえたぞ？

そしたら、何か食べていこうか・ん〜そうだな」

妙才さんが注文で迷っている。そんなことよりも、どうしよう〜

気が気ではないながらも料理を作っていく

か？

妙才さん、自分はちゃんとつくれています

助けた猫に怒られる・・・何故？そして、呼び出しをくらう（後書き）

反省会

苟？さんの登場です

話が少し進んだかな？

さあ、今回は遂に華淋さんと対峙します

さてさて、主人公の運命はいかに！？

今回の料理は【カツ丼】ですね

おいしいですよねカツ丼。自分的にはドンブリ界のHEROであり、頂点な気がします

大学の学食で運動部の皆さんがカツ丼に『マヨネーズ』をかけてやる

なんということを。

ショックでした、ええ、ショックですとも!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

はい、次回8話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しく願います

お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）（前書き）

感想にリクエストしていただけると嬉しいです

いただいたモノはガンバって話に組み込んでいこうと思います

お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）

SIDE：軍侍

胃が痛い、いてえーよ。マジで

はあ、どうすんの？この状況

ねえ？初めてだよ、こんなに緊張してんの

「どうした、臧覇？」

「ああ、妙才さんが

オレ、なんかやらかしましたか？」

「まあ、やらかしたといえばやらかしたのかもしれない
いつものヤツはどうした？」

「煙管のことですか？すってる場合じゃないですよ。啜ってるだけで精一杯

はあ、憂鬱ですな

それはそうと教えてくださいよ、結構本気出して作ったんですけど、
ダメでしたか？」

「そう暗い顔をするな。直にわかるよ
ほら、ちゃんと身だしなみを整えろ」

正解を知ってる感じで質問が流される。どうしよう？
はあ、ため息しかでねえ

「さあ、そろそろ時間だ。行くぞ」

「へーい」

玉座の間にて……

「平伏して待つように」

元譲さんから指示を受け、待つ。胃痛に加えて、頭痛もしてくる

オレは、今、確実に追い込まれている

「領主、曹操様。御成りである」

誰かの声で、周りの空気が変わる。なんか温度が下がった感じがする

「面を上げよ」

はっ！？緊張しすぎて反応が遅れた、あぶねえ、あぶねえ

言われたとおり頭を上げる……ん？

……んっ！！！！???

見たことあるぞ。どこかで……

「あっ！！！」

「どうした！！」

ヤベエ、元議さんがものすごい形相でこちらを見てくる

「春蘭、よしなさい」

「はっ！！」

元議さんを一撃でおとなくさせる。そして、こちらを見る

【ニヤニヤ】してこちらを見ている、この人気付いている

「昨日はごつも。まさか、あなたとはね
運命かしら？」

「イエイエ、メツソウモマイ
モツタイナキオコトバヲ。スイマセン。ホント、スイマセン、」

「あら、そんなに緊張しなくてもいいのよ？」

あの時は、あなたも急いでたみたいだし？わたしも不注意だったから、しかたがないわ

ただ、一言あつてもよかつたんじゃない？」

……確かに。レア物があったからとはいえ前方不注意だった。しかも、両成敗とはいえ女性にぶつかったのだからアレは無かった

『急いでるんで』は無いだらう

しらなかったとはいえ、相手はこの町のお上なのだから

SIDE：華琳

まさかあの時ぶつかった男が正体なんてね、運命かしらね
ここは1つ・・・

「昨日はどうも。まさか、あなたとはね
運命かしら？」

「イエイエ、メッソウモマイ
モツタイナキオコトバヲ。スイマセン。ホント、スイマセン、」

ちよっと、ビックリするぐらい緊張してるじゃない！声に変な感じ
になってるはね・・・
もう少し虐めてみようかしら、次はどんな顔をしてくれるのかしら

「あら、そんなに緊張しなくてもいいのよ？
あの時は、あなたも急いでたみたいだし？わたしも不注意だったか
ら、しかたがないわ
ただ、一言あってもよかったんじゃない？」

さあ、どう出てくるかしら

すると彼の雰囲気かわる。何か考えてるようだ
深く考え、何かを納得したような顔をし、彼は言い放った

臧覇は綺麗に正座をし直し、着衣を整え、姿勢を正し、口を開く

『あなた様の言う事、一々もつとも御座います

まずは、件の失礼の談。平に、平にご容赦を

某、姓は臧 名は覇 字は宣高。以後お見知りおきを

あの時、自分は店にて珍しい食材を手に入れ、少々浮かれておりました

直後、曹操様とぶつかりました

知らぬ事とはいえ、町の長である貴方様に・・・いえ、女性に対して失礼な事した件について謝罪が無かった事。

男として、ましてや、人としてあつてはならぬ事に御座います

したがいまして、この臧覇。今一度、謝罪を申し上げます

申し訳ありませんでした』

正直驚いた

其処にいたのは正しく礼儀守り、とても床しい職人の顔そして、姿だった

その男は背は大きい方なのだが、先ほどの口上を述べている時から彼の威風が、真剣さと合わさって、更に大きく見える

はっきり言って、先ほどまでいた緊張して、声がおかしくなっていた男は無く、とても同一人物とは思われなかった

春蘭、秋蘭の両名も彼の口上に、そしてその態度に文句は無さそうである

周りも彼のその堂々とした態度に魅入られているようだ

ほんとに驚かしてくれる。この男は

「見事！見事よ、臧覇！！」

貴方の申し開き、確かに受け取ったわ」

そう言つと私は軽く拍手する

すると、つられて夏候姉妹を筆頭に手を叩いていく

「ねえ、臧覇？」

「はっ！」

「私専属の料理人にならない？」

貴方の作った料理はどれもすばらしかったわ、正直私でも同じように作れるかどうかあやしいわ

どうかしら？高待遇でもてなすわよ」

「……………すみません、お断りさせていただきます」

「あら、なぜかしら？」

「お誘いは嬉しいのですが、自分が目指すモノは只一つ

『万人に愛される料理を作る料理人』に御座います

曹操様専属になれば、かないませぬ」

「ぼかーんとしてしまう」

「ホンキなの？」

「ホンキにて」

「くつくつく・・・、あーはっはっはっは！！！！！！」

「いいわ、いいわよ、臧覇
臧覇よ、あなたに褒美を取らせるわ。何がいいかしら」

「特に考えておりません、如何いたしましょう・・・おっ！そ
うだ

曹操様、今度ウチに食べに来て下さい
それで宜しいです」

「そんなの当たり前よ。是非行かして貰うけど、それではダメね」

「ん、思いつきませんね」

「わかったわ。褒美は此方で決めるわ
それでいいかしら？」

「はい。特に物欲も無いので、貰える物なら貰いますよ」

SIDE：軍侍

城から出る

「ふう〜、つかれたあ〜」

もう帰って寝よ、今日は仕事ムリ

それにしてもなにくれっかなあ、鍋とかがイイな、あと包丁でもいいな」

能天気になんな事を考えている

しかし、予想は大きく裏切られ事になる

やり

過ぎじゃないですかい、曹操様

お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）（後書き）

反省会

言葉使いは難しいです

今回は特に

料理は皆無でしたが、次からは頑張っ
て行こうと思います

では、9話目でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しく
お願いします

待ってる時が一番楽しいって事多いよね？

SIDE：軍侍

あの呼び出しが過ぎて、かれこれ一週間経つ

この間、曹操さんはもちろん、夏侯姉妹も来てくれない。まあ、理由は解ってるんだけどね

最近、巷を騒がしている【黄巾党】が頻繁に出てきているらしい
朝廷も権威はもはや尽きようとしている、世知辛い世の中になった
もんだ

そんな中、楽しみにしている事がある

「にいちゃ~~~~ん!!!!!!」

おっ！来たようだ、忙しくなるぞ

「来たな、季衣ちゃん。今日は何にするかね？」

「うん、そっだなあ・・・」

じゃあ、今日もオススメで!!!」

「了解」

先ほど言っただお楽しみとはこの子の事である

最近、曹操さんトコに入った“許緒ちゃん”で、近衛を務めている
そうだ。若いのにエライねえ

「おまちどうさまでした」

「いったただつきま〜〜す!」

彼女の前に料理を出すと、目をキラキラさせてパクついていく
すごい食いつぷりに目の癒しをおぼえ、楽しんでる

因みに出しているモノは、薄めに味付けしたご飯四合のチャーハン
の上に回鍋肉を乗せた、オリジナル料理である。試作段階のモノで
も美味しければ食べると言ってくれているので助かっている

「美味しかった〜、ごちそうさまでした!!!!!!」

この挨拶も教えてあげたら農村出だからなのか、気に入ってくれて
使ってくれている

ホントにいい子だよ、お前は（泣）

「そういえば兄ちゃん、字を教えてほしいんだけど、いい?」

「そろそろ休憩だから良いぞ
でもまたどうして?勉強か?だとしたらエライなあ〜」

そう言い、頭を撫でてあげる

「エへへ／＼／＼／＼
華淋様や秋蘭様が『軍に入ったんだから、報告書をだしてほしい』
って言われたから
あんまり勉強つてクライだからいやなんだけど」

その気持ち解るぞ
オレにもそんな時期もあつたもんだ。

ウンウン、解るぞ

腕を組み共感する

「もう1つは友達に手紙を出そうと思ってるんだ!!」

「友達？」

「うん！おなじ村の子なんだけど、一緒にはたらかないかな〜っ
て思つて

だから、手紙を出してこっちに来てもらおうと思ってるんだ」

「へえ〜、そいつはイイ。だったら、ちゃんと書かなきゃな
お〜し、任しとけ!!」

兄ちゃんの腕にかけて教えてやるぞ〜」

「うん!!」

季衣ちゃんに字を教え、手紙を出してから更に四日ほどたった

何だろうなあ、曹操さんの褒美つて

調理機具だつたらいいなあ、最近客が増えたせいか若干効率が悪く感じる時がある

そんな事を考えてると・・・

「あの〜、やっていますか？」

「ん？おおうっ！！」

「すいません、少し考え事をしてまして何にしましょう？」

小さな女の子が其処にはいた

この子との出会いが自分の人生に大きく関わってくる事になるとは、この時はそんな事を露ほどにも思っても無かった

待ってる時が一番楽しいって事多いよね？（後書き）

反省会

今回は少し短めです

そして今回のメイン料理はチャーハンの回鍋肉乗せです
カロリーは高いです

でも、意外と美味しいんですよ

では次回は9話目でお会いしましょう

宜しく願います

幾らなんでも、それは無い!!

SIDE:???

「そんな子はいないねえ」

「そうですか。忙しい中すみませんでした」

私は建物を後にする

「はあ」。

まあ、どこにいるの？手紙には大きなお城で働いてるって書いてあったけど

それっぽい所は聞いて回ったけど、いないじゃない」

ぐうぐう

おなかに手を当て、私は少し恥ずかしくなる

そういえば、そろそろ日が暮れようとしている

今日はこのくらいにして、また明日探そう

わたしはそう思い、大通りに出て夕飯の場所を探し始める。すると・

「店長、美味しかったよ。また来るぜ」

「おう、ありがとう」

おまたせしました「お酒、お願い」はい！少々おまちを」

1つの屋台に目が止まる。すごく賑わってる
たった一人で結構な人をさばいてる、すごいなあ

私は少し様子を見て、お客さんが捌けて来るのを見計らって席に座る

「いらしゃい。何にいたしましたしょう?」

私は品書きを見ると、物が少ない事に気付く

そんな事を考えてると、隣に座っていたおじさんが話しかけてきた

「おじょうちゃん、この店は初めてかい?」

「はい」

「ここはね、好きな物を頼んで良いんだよ

此処の大將の作れるなら、それを作ってくれから」

「おっちゃん、それはオレが言う事だろ?

まったく。そろそろ帰ろうぜ?でないと、かみさんがまた探しに来るぞ」

「おっと、そうだな。勘定たのむよ」

「あいよ」

そんな会話をし、帰っていく

「それで、どうするかね?」

と店長さんが聞いてくるので・・・

「チャーハンをお願いします」

「あいよ。」

チャーハン、1つ!!」

「ほい、お通しだよ」

目の前に小鉢に乗った黄色いモノが出てくる、漬物だろうか？

「えっ!？」

あの、頼んでないんですけど」

そう言うと、店長さんは説明をしてくれる

へえ、おもしろい事がかんがえるひとだなあ

漬物を食べながら、店長さんの調理を見ていく

小さい器に、片手で割ったタマゴを落とし、左手に持った菜箸を使って中身を溶いていく

カッカッカッ!と耳障りの良い音がしてくる

次に皿に適当にご飯を取る

中華鍋を取り出し、火に掛け、温まって来たら、油を入れる

ここからの調理速度はグンツと速くなる

鍋にタマゴを入れ、少しかき混ぜご飯を入れていく

すると、店長さんはお玉を逆手に持ち直し、底の方でご飯を押さえ

ていく

それが終わると、お玉を木ベラに持ち替えすばやくご飯をきつていく、次に鍋を振る

これを数回繰り返し返していくと、さっきまで白い部分があつたが見事な黄色にご飯が変わっていく

具を入れ、更に鍋を振っていく

調味料を加え、鍋肌に回し掛け入れていく

私も料理を得意としているが、はつきりと解る

『この人は上手い』

この人の手つきを更に視ていく

終盤に火を弱め、刻んだネギを加え、ほぼ余熱で炒めていく

そうこうしていると出来上がり、お玉に持ち替え、皿に盛っていく最後に赤い細いモノを上に乗せて出来上がった

「おまちどうさま、チャーハンでございます」

目の前に出て来たチャーハンは見た目は普通だったが、断言できる。

これは美味しい

温かい湯気とともに伝わってくる、美味しいチャーハンの独特の調味料の焦がした香りとネギの香り

そして、レンゲで一口・・・っ！！！！、やっぱり美味しい！！！！！！！！

ご飯のパラパラさ加減、更に具として入っている焼豚と小ぶりの海老も丁度良く火が通っており食感も抜群である

極めつけは、上に乗っているこの赤いモノ
コレと一緒に食べるとこれが生姜だとわかる

生姜の酸味と辛さが、チャーハンも味と風味が更に美味しく変化する。不思議だなあ

気が付くと全てを食べており、少し寂しくなる

「美味しかったです！！」

あの、一つ聞いてもいいですか？」

「ん？なんだい」

「この赤いモノは何ですか？生姜なのはわかるんですけど・・・」

「ああ、これは『紅生姜』て言うもんだよ」

「『紅生姜』・・・」

「あのこれん」て〜んちよう、やってるか〜い？」「！！」
酔ったおじさんが入ってきた

「おっさん、また来たのかよ」

店長さんがやれやれと対応していく

「すまんね、何か言っただけだよ。」

「いえっ！何でもありません」

「ここにお金置いていきますね、ごちそうさまでした」

「と言いつつ、足早にその場から去ってしまった」

遠くで「またのお越しを」と聞こえてくる

宿に着き、布団に入る

「今日も疲れたなあ……。あのチャーハンおいしかった、私の腕もまだまだですね」

「……よしっ！決めた！！！！」

私はある決意をし、眠りに落ちた

S I D E E N D

S I D E : 軍侍

オレはスキップで宿に帰っていた

それというのも、オレが最初から図面を引き、鍛冶屋のオヤジと話し合いに次ぐ話し合いで遂に完成した【串焼き機】を持っているからだ

この日のために寝る間を惜しんで、タレを作った

そして、例の店で鶏肉や他の部位を手に入れ、気分はサイコー！！！！

宿に着き、早速試そうとしていると……

「宣ちやくん、お客さんだよ！！！」

ちっ。なんだよ、今からが本場なのに

「店長殿、お忙しいところ失礼します！」

ウチの常連の兵隊さんが玄関にいた

「曹操様から城に来るようにと伝言であります」

「はっ？」

なんだろ？……っあ！

遂に来たか！！例の褒美が！！！！

兵隊さんに連れられ、城に向かうと……

「やっと来たわね、臧覇」

春「遅いぞ、臧覇」

秋「姉者」

「すみません、急に呼び出すんですから
仕度に手間取ってしまつて」

「まあいいわ、着いて来なさい」

そう言うと三人は歩き出した

「ちよつ！待ってください」

慌てて着いていく、何だ？

「妙才さん、どこいくんですか？」

「ついてくれば解るぞ」

含み笑いをし、どンドン歩いていく

わけわかんねえな、おい！

大通りの交差点のある一角で足を止める

「これよ」

曹操さんは建物を指指す

その建物は、作りたての新品で大きなものだった

「何です、これ？」

曹操さんは改まって・・・

「臧覇！」

あなたに褒美を取らせるわ!!

褒美はこの建物よ!! いい？ 此処で店を出しなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「理解出来ないのかしら？ あなたにこの店をあげる。いい？」

二日後までに内装の図面を提出しなさい、そのとおりに作ってあげるから」

オレは着いて行けてないが、彼女はどんどん進んでいく

「ちよい待ち!!!!」

「なによ？」

「色々といいたい事は在るが、混乱してるから一言・・・・・・・・マシか？」

「まじか？」

「いやいや、すみません。ホントに？」

「ええ。ほんとよ

あなたはこれだけの事をしたのよ
いいわね？」

二人ともいくわよ」

曹操さんは言い終わると踵を返し、来た方向に歩いていく

「よかつたな」

と肩にポンツと手を置き、妙才さんは行く

「華淋さまに感謝しろよ」

とまるで自分の手柄のように胸を張っていく元議さん

曹操さん、幾らなんでもやりすぎじゃあ御座いませんか？
オレは今、引いてますよ？ ドン引きです

どろろどろろ？

幾らなんでも、それは無い！！（後書き）

反省会

遂に主人公が一国一城の主になりました

さてさて、どうなるんでしょうか？

今回のメイン料理は【チャーハン】です

自分個人の意見として、チャーハンや焼き飯の美味くない店はありません
まり期待できないというのがあります

あくまで個人的な意見なので怒らないでください

スイマセン、スイマセン

でわ、次回10話でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しく願います

修行？考えた事無いなあ。職人魂VSシナ竹籠 前編

SIDE：軍侍

曹「コレでいいのかしら？」

「はい。二日ほぼ寝ずに考えた結果です………どうでしょう？」

曹「よろしい。これなら私が予測していた予算の範囲内になるわ
しかも、自由に描けといったけど無茶な注文して来なかった
あなた、好印象よ」

「はあ」

曹「では、早速明日から取り掛かるわ
そうね……七日よ」

「はい!？」

曹「七日で完成させるわ
楽しみにしてなさい、^{パチッ}宣高」

ウインクしちゃったよこの人

マジか。七日で出来るもんか？内装工事って
建築には明るくないからわかんねえけど

まあ、のんびり待つとしますか

昨日は徹夜だったから今日は焼き鳥のタレの改良だけにして、帰って寝るとするか

「ア~~~~、ん」

でっかいあくびが出る

「ねみい」

「店长、おかえり」

「悪いね、牛金さん

昼飯まだだろ？何か作るよ。何がいい？」

「じゃあ、いつもの“てきとう”で」

「あいよ」

自分が曹操さんのところに言ってる間、店番をして貰っていたこの人は

陳留の城の守衛隊長【牛金】さんで、屋台の一番客になる人

その時は、昇級試験の当日で緊張していた所に例のカツ丼を食べさせました

次の日に『あのカツ丼なる物のおかげでわかりました』と言ってくれて、今に至る

「ご馳走様でした」

「あいよ」

「そろそろ時間が故、失礼します
また来ます」

「ありがとうございました」

帰っていく牛金さん

さあして、仕込みをはじめますか

鳥を適当に捌き、用意していた数種類のタレの中から一つずつ試していく

すべて終わり、模索していると・・・

「あ・・・」

「ん？あつ、キミは・・・」

「先日は美味しいチャーハンを有難うございました」

「いやいや。喜んでくれたなにより

それで、今日はどうしたの？」

「あの、今日は折り入ってお願いがあつてきました」

「オレにかい？」

「はいっ！...！」

なにやら顔を赤くし、いささか緊張気味の様である

……もしかして、告白か!!!?

「わ、わわ、わたしを……」

「わたしを弟子にして下さい……!!」

……は？

……

「……何て？」

「弟子にして下さい」

「オレの弟子に、キミが？」

一旦自分を指差し、次に女の子を指す

「はい……」

ターンエンド

結局、上目遣いの涙目+ものすごい熱意〓白旗で降参でえーい

しかしだ、今考えてみるといいかも知れない

店を持つ〓人手がいる

ということは、人員が確保された事になる

さらに、この子自身も料理が上手いので厨房も任せられるので、オレが考えている事が出来る

よおーし、早速行動あるべし

「流琉、片付け終わった？」

「はい、師匠」

「帰るか。それと、流琉？」

「なんですか？」

「師匠つて奴さあ、やっぱりやめないか？なんだか、体が痒くなる感じがするからよ」

「でも、弟子入りしたのですからちゃんとしないとしまして」

「それでもだ」

「でしたら『兄様』はいけないでしょうか？」

「兄様？なんで？」

「あの、その、憧れだったんです
兄がいる、そのようなことに」

ブフツ！！（鼻血が出ました）

「に、兄様！！？」

「イヤツ！なんでもない！！ そんなことよりもだ、それでいこう
！！」

片手で鼻を押さえて、もう一方の手で親指を立てて“GOOD”

我が弟子、改め、我が義理の妹
いい子だ、間違いない！！！！

そして、次の日・・・それは突然だった

SIDE：？？？

「曹操殿もありか。しかし・・・」

私は一息つき、そう考える
しかし、あの空気には中々どうして入っていきける勇気が無いな
百合百合しいのは勘弁だな

「もう日が傾いてきたな
そろそろ、宿に戻るか」

そう思い宿に戻ろうとし、大通り出ると、なにやら美味しそうな臭いがしてくる

その臭いの方に目をやると、一見の屋台が目に入る

兵隊や民が楽しそうに飲み、食いをしている

「面白そうだ」そう呟き、屋台の方へ足を向けた

「いらっしゃいませ！！何名様ですか？」

「一人だ」

「一名様です」

「いらっしゃいませ」

少女が言うと、火元の前にいる男が答える

頭に黒い布を巻き、服は白で統一し、一心不乱に鍋を振っている

「何にしましょうっ？」

品書きを見ると、そして少女が説明してくれる。なるほど、ますます面白い店だ

「とりあえず、酒をたのむ」

「冷と温がありますけど、どちらになさいます?」

これまた解らず、尋ねると答えが返ってくる

「では、温で頼む」

「はい! 酒の温、一丁!」

「はい、よろこんで」

「お通しになります、どうぞ」

質問をし説明を聞く。本当に面白い店だ

客が少なくなり、私を含め2・3人になったので私はしめたと思、ある壺を出す

「この酒にはこのメンマが合うな」

大好物であるメンマ。肴にはもってこいだ

「ねえちゃん、美味そうだな。少し分けてくれよ」

隣にいた男が聞いてくる、今の私は機嫌がいいので・・・

「一口だけですぞ?」

「おう!・・・うめえ!・・・!このメンマすげえ美味い!・・・!」

「そうであるっ?」

更に機嫌がよくなる、親父殿よ。わかるか？この味が

「あの〜、私も一つ宜しいでしょうか？」

定員の少女が聞いてくるので、一掴み皿にとり分ける

そして、少女もまた・・・

「おいしいー！！ 食感といい、風味といい、おいしいです！！
！！

兄様！このメンマ食べてみて下さい！！？」

妹なのか？まあいいが、男もやってくる

「あんまり採られても困りますぞ？」

冗談めかしに言う

「では、一つ・・・」

男が食べる。目を瞑り、良く噛み、飲み込む

「美味しいですよね？兄様」

「・・・よく出来てる。よく出来た完成度の高い技術食品ではある」

「そつであ」「だが、「ん？」

『だが、遊戯の域は出ていない』

なんだと・・・この男はなんと言ったのだ？

修行？考えた事無いなあ。職人魂VSシナ竹籠 前編（後書き）

反省会

流琉ちゃんが弟子入りを果たしました

オリキャラも考えましたが、あんまり自信が無い

いづれは出そうと思います

そして、時系列は進みませんが、新たにキャラが出てきました（？
??にした意味あるかなあ）

そろそろ屋台をやめ、店になってからの話もかんがえなくてはいい
ません

中々難しい

では、第11話でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

因みに最後の台詞は、ジャック・範馬兄さんから頂きました（わか
りますよね？）

料理作ってるだけですよ？職人魂VSシナ竹籠 後編

SIDE:???

「貴公、今何と言った？」

「ん？いや、だから・・

完成度は高い。がしかしだ、これでは遊戯の域は出ていないって言ったんだ」

この男は何を言っているのか？
私には理解できない

「このメンマの何処が不満なのだ!!??」(ドンッ!!)
机を叩き、男に対し抗議する

「・・・少しまってる」

そう言うと男は屋台の下に潜り、なにやら探し始める

「あつたあつた、いい具合に漬かってるか？」

男は私の前に小さな壺を置き、蓋を開けた

「食べてみな」

中身はメンマだった

「こゝ、これは！！」

私には解る！このメンマは・・・

私は箸でメンマを一滴みし、口に入れる

「・・・・・・・・」

自分は今まで何を食べていたのか？自分自身を恨みなくなる

「店主よ、お願いがあります」

「なんだい？」

「このメンマを売っては下さらぬか？ 御頼み申す、この通りで御座います！！」

この趙子竜、一生のお願いにございます」

恥も外聞知った事ではない

此処にあるメンマをどうしても手に入れたい
私は切に願う

「・・・・・・・・無理だな」

「な、何故です！！金子が足り無いのであれば、この身をしてで
「そうじゃねえんですよ」「では？」

「あなたはこのメンマを認めてくれた。其処まで言うのですからそ
うなのでしよう

しかし、駄目なんですよ。これでは「

そういうと男は壺をしまい始める

「まだ完成とはいえない。

この程度では、自分の納得したメンマではないんですよ

故に認めてくれた貴方には失礼だが、これは謂わば【失敗作】なんですよ」

私は強い衝撃を受けた

自分は曲がりなりにメンマのことを知り尽くしていると思っていたしかし、その私にこれほどの物を出しておきながら、この男はまだ道半ばだという

店を後にし、宿を取る

酒をちびちびやりながら、考え事をしていた

そして、ある結論に達した

「待っていてください、あのメンマ……!」

SIDE:軍侍

「兄様、よかったですか?」

「ん? 何がだ?」

「あの人、なんだか思いつめて帰りましたよ?」

皿を洗いながら、我が妹：流流が聞いてくる

「しかたなだろ、ホントの事なんだし。それによ……」

「なんですか?」

「流流もいやだろ、自分の納得していないものを出すなんて。しかも相手の大好きな物ならなおさらだ」

「そうですね」

と一言だけ返事をした

片付けも終わり

「さてと、帰りますか?」

「はい、兄様」

屋台を引こうとしたところ、目の前に人が現れた

「もう終いか?」

「うひよひよひよひよい!!!」

あんだあ!?!だれだ!?!って……妙才さんじゃないですか」

「其処まで驚かれるとはな。傷つくぞ?」

「急に現れないで下さいよ、それに声を掛けるタイミングも!?!」

「たいみんぐ？」

「なんでもありませんよ！」

「まったく……で、どうしたんですか？」

「例の物が出来た」

明日、華琳様が直々に見に行く

お主も着いて来るようにと伝言を頼まれた」

「つてもう！！？」

速過ぎじゃあないですかい？まだ五日しか経ってないですよ」

「余程お主のことを気に入ってるのか、事の他政務よりもそつちを優先してみたいたいな

感謝しろよ？」

そんなんでいいのか、曹操さんよ？

「兄様、例の物とは何ですか？」

「そつか流琉はまだ知らないのか

じゃあ、明日のお楽しみだな」

「えー！何ですか、それ

教えてくださいよ、兄様！！？」

「まあまあ」と流琉をいじりながら、俺達は宿へ帰っていった

次の日

「遅いわよ、宣高」

春「そうだぞ。たるんでるんじゃないのか!？」

秋「姉者、そういうなよ」

「すみません」

遅刻してしまった。理由？寝坊だよ、寝坊
楽しみで楽しみで寝れなかったんだよ

この時に曹操さんに流琉を紹介し、勧誘されかけたが何とかくい止めた

そして遂に・・・

「着いたわ」

「おあ~~~~!!!!!!!!」

なんとことでしょうか

つい先日までは何でもなかった空き家が、外観からして立派な佇まいをしている

そして内装は、希望道りでカウンター席、テーブル席、2階は宴会場
奥は倉庫と居住区になっている

「兄様、こ、これはいったい!？」

「流琉よ。もう屋台を引つ張る生活は終わった！！！！」

今度からはこの店にて料理を振舞う事になった」

流琉はまだ状況を理解するのに必死で着いて行けてない様だった。
まあ、無理も無いがな

「開店準備が出来たら、私たちを呼びなさい
お客様第一号になってあげるわ」

「ぜひ！宜しくお願いします！！」

曹操さんが帰った後、俺達は家財道具を揃えて、早速機具の試運転
に取り掛かる

注文通りに出来ているので、本当にあの人には頭が上がらない

確認しを終わり、流琉は寝てしまった

今日はビックリさせてしまったからな、色々と疲れたのだろう

「ついに此処まで来たか」

火のついてない煙管を加え、感慨深くしていると

「其処の御仁！！」

「ん？」

振り返ると、昨日の女性が立っていた

「おやっ？お客さん、どうしたんだい？」

「おお、そつだ、今度からは此処でやるから、また来てくださいよ」

「その事はいい、それよりもお主に頼みたい儀が御座います」

「メンマですか？なんべん来ても駄目なものはだm「私を弟子にして下され」……は？」

「な、なんだつて？」

「わたしは姓は趙 名は雲 字は子竜

店主のメンマ道に惚れました。故に私を弟子にして下され」

今の自分はそつとつ間抜け面なんだろうなあ

どつして、どつなつた？

料理作ってるだけですよ？職人魂VSシナ竹籠 後編（後書き）

反省会

はい、後悔はしておりません

あっ、うそっうそっうそっうそっうそっうそっ、冗談です

やってしまったもんはしゃあないので、少し路線変更しようと思えます

では、次回でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しく願います

屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ（前書き）

主人公の店の名前何にしようかの〜

屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ

SIDE：軍侍

「主、ただ今帰りましたぞー!!」

「おかえり、星。今日はどうだった？」

「春蘭殿は毎度毎度、からかい概かあります
やってて飽きませんな。ハツハツハツハツハ!!」

「そうかい、そいつはよかった

曹操さんはどうだい？」

「仕事模様、戦の才覚等、あやゆる面でのあのお方。

流石と言つべきですな

会つたびに閨に誘われる事はこまりますが・・・」

何をやってんだよ、あの人は

「手伝えるか？」

もう直ぐしたら流琉の休憩が終わるけど」

「私も少しの休憩後、手伝いましょう」

「悪いな」

最近我がファミリーに加わった趙雲 真名：星は今、家の給仕兼曹操軍の客将として働いて貰っている
というのも……

遡る事彼女が弟子入りを言ってきたとき、自分の槍を捨ててまでオレに弟子入りしたいと言ってきたので、こいつはマズイと思い……

「アンタがそれを捨てるの事はこの世の損失になる

なにより、武人の魂である武器を捨てさせる程オレはバカじゃあねえからよ

弟子入りは認めよう。ただし……

曹操さんとトコの客将として働きに行くこと、帰ってきたらウチを手伝う事

コレが条件だ。どうだね？」

妙才さんがひと手が足りないって、ぼやいてたからな
ここで恩を売っておくのもアリだな、それに趙雲という武人の為にもなる

この発言の直後、二つ返事で承諾し、後日妙才さんに紹介、手続き

と淡々と進み今に至ってる

「兄様遅れました」

あつ、星さん。おかえりなさい」

「うむ、帰ったぞ

流琉、何時になったら『姉様』と呼んでくれる？」

「あゝ、いや、その照れくさくて

スイマセン」

「誤る事は無い、徐々に慣れていけばよい」

「二人とも後は任せるぞ、二日後には曹操さん御一行が来るからな
ちゃんと仕込みを頼むぞ」

「わかってますよ、兄様」 「耳にタコですぞ、主」

家族にそう言つと、俺は自称【研究室】に籠もり、対曹操用に試行
錯誤していた

宴会を経て、準備を含めて五日後には開店する

楽しみと緊張が今からもうしている。お泊りに興奮している小学生
か！

明日はアソコに行ってみつか

次の日

カランコロンカラン

「大将、いる？」

「いるよ

いなかったら店をあけてねーよ、まったく」

「まあそう言わず

今日はいい物入ってるかい？」

「はあ、来なよ。奥だ」

店長に着いて行く、今回はどんな物があるかな

「昨日手に入った奴だよ

魚だな、色々入ったから視て行ってくれ」

いよいよ恐ろしいなこの店は

なんでこの地に、てかこの時代にいるんだよ

マグロ、それに魚のヒカリモノが

「店長、この魚達、どうやって手に入れたの？」

「この前の亀もどきをくれた奴が漁の最中に捕まえたから、貰ってきた」

そいつを今度紹介してくれ

「これみんな貰うよ、明日また取りに来るから慎重に扱ってくれよ
鮮度を落さないでくれ」

「あいよ」

買い物を済まし、帰っていく

明日の献立は決まった

首を洗って待ってるよ、曹孟徳！！！！！！！！

SIDE：店長

彼が手を振って帰っていく

「はあ、楽で儲かるバイトって聞いたけど、辛気臭いところで商売って

めんどくせえーな、何時まで続ければいいんだよ」

魚を持って、奥に歩いていく

ある部屋につき、中に入る

魚の入った桶を大型の業務用冷蔵庫に入れていき、パソコンに電源を入れ、背伸びをし、欠伸をしながらメールを作成していく

「やめよっかな、このバイト」

そう呟き、文を書いていく

宛名：『神様』

屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ（後書き）

反省会

最後の場面は、より料理を書きたいので追加しました

でも何でもかんでもってわけではありません

幾ら何でもってというのは出しません

あんまり本編には関わってはきません

さて次回でとりあえず第一章を終わらそうと思います

できるかな（汗）

御見苦しいとは思いますが、宜しく願います

曹御一行様御案内！！

SIDE：軍侍

遂にこの日がやって来た

静かな店内にオレ、流琉、星。
この三人が中央に立ち、

「俺たちの新たな門出の最大の敵がもう直ぐやって来る。この日のために色々とやってきた
そして今日、我々の進化が問われる。気合入れていくぞ」

「「おー！！！」」

仕込みを始める

汁物………OK！、お通し………OK！

「流琉、串場はどうだ？」

「季衣の事を考えて、山ほど串打ちをしてみましたから大丈夫です
！」

「よし！星、そっちはどうだ？」

「酒を方も抜き無しです、つまみも良い出来ですな」

そして、一刻した時奴らは現れた

「来たわよ、宣高」

「いらっしゃいませ、席へどうぞ。 星、案内を」

「かしこまりました」

今日来たメンバーは孟徳さん、元譲さん、妙才さん、季衣ちゃん、そして……

「おや、文若さん？」

「一緒にいるという事は、文官になれたのですね！」

「ええ、あの後で試験を受けてね」

「宣高、桂花は文官じゃないわよ？」

「と……いつと？」

「我が軍の軍師になってもらったの」

「そいつは凄い！」

「イヤあ、コイツはめでたいねえ、めでたい」

「知り合いが出世、気分がイイとノツてきましたよ」

「本日は腕によりを掛けて御持て成しをさせてもらいます」

「期待してるわ」

元譲さん、季衣ちゃんはよく食べるので流琉に焼き鳥を任せ、ガン

ガン焼いていく

オレの相手は、孟徳さん、妙才さん、文若さんの三人

「今日は『寿司』をお召し上がりになってもらいます」

「寿司？聞いた事無いわね」

「簡単に言いますと、ご飯の上に魚の切り身を乗せたものです」

「なにそれ、美味しいの？」

そのジト目、辞めてくださいよ？文若さん

「まあ、お前が作ってくれるのだ、間違いは無いであろう」

妙才さん、わかってらっしゃる！！

「いいわ、もらいましょう」

お願いするわ、宣高」

「かしこまりました」

軽く頭を下げ、調理に取り掛かる

まずは、お通しを出す

特性のガリ。こいつは好き嫌いが分かれるがどうかかな？

「この漬物、中々奥が深いわね
酸味、甘味、どれをとっても申し分ないわ。ただ、辛さが少し強
いと思うわ

私は辛いのが苦手だからなのかもしれないけどね」

「そうですね、孟徳さんは辛味が苦手つと、覚えときます
でも気に入ってくれたようで何よりです。御二人はどうですか？」

「私もおいしと思うよ」

柔らかな笑みを浮かべて、ガリをつついていく妙才さん

「私は・・・」

文若さんは箸が進まないようだな

「苦手ですか？」

「おいしいと思うのだけれども、酸味が少しきつい」

「そうですね」

「悪いわね、文句つけて」

「いいえ、私の味覚が絶対という訳では御座いません
お客様の意見を取り入れて、万人に愛される味にする
これが自分の目指す料理ですから」

「素晴らしいわ、素晴らしい心がけよ。宣高」

「有り難う御座います」

でわ、此方が今日のお品書きになります」

品書き：鮪、鰹、平目、鰹、烏賊、蛸、玉子焼・・・

「どれも聞いた事無いモノばかりだな」

まあ、そうでしょうな

魚を生で食べる文化じゃないからな、どうかな

「なら、あなたにまかせるわ」

「かしこまりました」

この辺から《三分クッキングのテーマ》がかかります

お題：握り寿司

まずは、酢飯の作り方

寿司酢が無いので、酢、砂糖、塩を混ぜたもので代用する

炊いたご飯に寿司酢もどきを加え、混ぜる

混ぜ終えたら、団扇で扇ぎ、飯を冷やしていく

次に刺身を作っていく

あらかじめ身をブロック型に切っておき、そこから適度な厚みに切り分けていく

ここで・・・

「星、お酒を頼む」

「かしこまりました」

星が今日のために選んでおいた酒を出し、場繋ぎをしてもらう
彼女の酒のセンス抜群だ

中々通な酒をチョイスしてくる、尊敬するなあ

ここでお酒でお口直しをしてもらう

皆さんが堪能している間にドンドン握っていく

右手に適度に酢飯を掴み、中である程度形を作っていく

左手には切り身に山葵をつけ、此処からは素早くいきます

左手の親指で酢飯を軽く押さえ、右手の親指・人差し指・中指で立方物を作る感じで押さえつけ

右手でお寿司をひっくり返します

ひっくり返すのは、縦方向でOKです

ひっくり返すと、まだ指で押さえていない部分が左手親指の方に来るので、まだ指で押さえていない部分を左手の親指で押さえてから、左手の人差し指・中指・薬指・小指で立方物の受け皿になるように作ります

ここで切り身と酢飯を密着させないといけないので、右手の人差し指と中指で軽く上から押さえときます

最後に左手で上下を軽く押さえ、右手の親指と人差し指で側面を押さえ、形を整えたら完成です

コレを繰り返して、並べていくとちゃんとした寿司のコースが出来ました

調理ターニング

SIDE：華琳

始まったわね、どのようなモノを出してくれるのかしら

宣高は片手でご飯を掴み、生の魚の身を上に乗せ、素早く且つ的確に形を作っていく
見事としかいえないわね

これほどの職人がいたなんて、この曹孟徳もまだまだということね
それにしてもなぜかしら、彼の真剣な表情を見ると……

「//////////」

何なのかしらこの感じ……よく視ると少しかっこいいと思ってきたわ

隣を見ると……

「//////////」

二人も黙って、彼の所作を見ているようだ

「出来ました、どうぞ」

出てきたものに私は驚きを隠せなかった

木の板の上にある、様々なモノ

色鮮やかとまではいかないものの、なんとなくではあるがキラキラと輝いているように思える

「皆さん、食べるときは切り身に醤油をつけてからどうぞ」

言われたとおりに少し付け、口にする

美味しい・・・

魚の切り身、ご飯が丁度良い冷たさをしていて、最初は生を乗せる事を疑っていたのだが、コレでいいと納得してしまうほど、生の切り身の美味しさが伝わってくる

更に言うところの鼻を通る様なモノは何かしら？

聞いてみると『山葵』というものらしく、寿司という料理において風味等の役割を果たしているらしい

秋蘭は「すばらしい！特にこの光っているものが美味しい」と普段冷静な彼女が異常な食い付きを見せている

一方、桂花は「もっと作りなさいよ!」と照れ隠しにと悪態をついて要求している

タマゴが気に入った見たいね、「タマゴよ、タマゴ」といつてる

本当に底の見えないわ、この男
今から楽しみね

SIDE：軍侍

ある程度食事が済み、駄話をしていると酔った元讓さんが絡んできて、「わちゃちにも、たべちゃせろ!」と怒鳴ってきて、斬られそうになったりと色んな事があった

そして、最後に星が締めくくりにとメンマで作ったおつまみが意外と好評で曹操さんにお褒めのお言葉を貰って、酔っていたせいか星が泣き始めるという事件も在りつつ、時間は過ぎていった

そして、夜、店の前で

「今日は本当に充実した食事会だったわ、非常に満足よ。またちよくちよく越さしてもらおうわ」

「そうですね、そいつは何よりで」

「あら、言葉使いが違っわよ?」

「あっ、すいません」

つい自が出てしまった、こいつはいけねえ

「いいわ、あなたの腕に免じて、許してあげる
その言葉使いでいいわよ」

なんだか許してもらえました、いいのかねえ

「それとあなたに真名を許すわ、『華琳』よ
それと呼び捨てで結構よ」

「いいのかい？そんなんで」

「それほどあなたのうでに惚れてるって事よ」（パチッ）

またウインクしたよこの子

「そうか、ならオレもだ。真名は『軍侍』だ、よろしくたのむよ」

といい、手を差し出すと「ええ」と握り返してもらえた

そして、宴会から二日後

店の前に水を撒き、のれんを出し呼び込みを始める

「「「いらつしゃーい、いらつしゃーい！！本日から開店しました、
いかがですか？」「」
と流琉、星と一緒に呼び込みをする

そろそろあいつ等をよぼうかな？人手もいるしな

さてと、ここからが本番……！

用するか

オレの料理が何処までこの世界で通

ち……ってやるぜ……！！

曹御一行様御案内！！（後書き）

反省会

今回で第一部が終わります

ただ今、二部とオリキャラを製作中です

今回のメインメニューは【寿司】です

握り方は自分の経験と人の意見と情報を掻き集めて、字面にしてみました

どうですかね？わかりますか？

もっとわかりやすく書きたかったんですが、なかなか難しく、これが精一杯でした

スイマセン

では、次回第二部でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

新しい一步、そして、いきなり暗雲!?

SIDE:軍侍

黄巾もいなくなり、幾許の日が過ぎた

噂によると華琳達が、首魁：張兄弟を倒した聞く。やるねえ、奴さんもたいしたもんだ

華琳から店：○宣食堂（○の中に宣が入って、マルセン）、客足は上々、そろそろ人手が足りなくなってきた
何か策を講じなければ……

煙管を啜えつつ（流琉に注意されたので吹かしてはいない）、思索する

「ん〜、どうしようかねえ」

「兄様！ぼおっ〜としてないで手を動かしてください!!!」

「あいよ」

あせあせと妹が彼方此方の卓へと料理を運んで行く、昼のかき入れ時だ、俺のフォローでも精一杯だ

「主〜！只今帰りましたぞ!!!」

「ああ。星、流琉を手伝ってくれ」

「まかされた。チャーハン二、汁物二、漬物一のお客様は何処か」

!？」

「おう！ねえーちゃん、こっちだぜ」

「お待たせしました、ごゆっくりどうぞ！..」

星も接客業に慣れてきたようだな。しかし、彼女は客将ではあるが武官なわけでいつまでも武と接客を掛け持ちさせる訳には行かない本気でかंगाえねばなあ

夕方前ごろ、夜の仕込みを始める

漬物・OK、しるもの（今日は豚汁）・・・OK
ディナータイムが始まる

ものの三十分足らずで満員になる。いい！実に良いことだ！！

厨房は流琉に任せ、フロアーには星。今日は何とか回せそうだな

俺は鉄板焼きゾーンに陣取り、注文の品を焼いていく
今日は良い豚が手に入ったので、メインのポークステーキを中心に
色々な野菜を炒めていく

「おい、聞いたか？洛陽の事」

「都が何だっただ？」

「董卓の事だよ、董卓」

「そのことか。賄賂じゃなんじゃってひでえことしているそうじゃねえか。」

「なんでも物の流れも悪くなっているらしくてよ、特に商人たちはよ出入りを制限されてるみたいなんだよ」

「んなことになってんのか、たいへんだわ、そりゃ。大将、酒の温をおかわり」

「あいよ」

董卓・洛陽・とくれば……

「連合……(ボソッ)」

俺はそう呟くが鉄板の焼く音、客の声のなかに消えていった

それがさらに数日後の深夜、華琳が一人でやってきた

「めずらしいな。今日はどっいったことかね？」

華「明日、洛陽に向けて出陣するわ。だから戦勝を祈願しにきたの」

「反董卓連合ですかい？」

華「……よくわかったはね、どこでそれを？」

「飯屋なんて所は噂の集まるところだからな」

華「そう」

「で、実際どうなんだ。董卓ってやつは？」

ピクッ

今、明らかに動いたよな。眉が・・・OK聞かないほうが良いみたいだな

「まあ、町の飯屋のたわごとだ。ながしてくれてもかまわないさ」

そういうと、彼女の前に酒とお通しを出す

華「わからないの」

「とぅとぅとぅ」

華「向こうの軍師の策なのかしら、正体が全くつかめないのよ。あの桂花ださえね」

こいつは驚いた。あの猫耳フードをも欺く隠蔽術スゲーー奴もいたもんだな

「そついやあーよ、華琳さん。モノは相談なんだが・・・」

彼女は帰り際には、不敵な笑みを浮かべて帰っていった

店を閉め、外に出る

煙管を咥え、歩き始める。そう目的の場所へと

「おやつさん、きたぜ」

「きたかね」

「どうだ調子は？」

「かんぺきだな、ワシに掛ければこんなもの造作もない」

目の前には目的のブツがある、見たい、早く見たい！

「まあ、焦るな。ほれっ“バサッ”、どうだ？」

布の下から出てきたのは……

「完璧だ、確かに完璧だ！！」

勘定を払い、ブツを受け取る

俺は今、喜びを覚えている

それはとある計画を実行に移す事ができる事、そしてその準備がたつた今整った事に対するものだ

俺は俺の目標の達成のため、その第一歩を踏み出す事にした

新しい一歩、そして、いきなり暗雲!?(後書き)

反省会

先ずは謝罪を・・・すいませんでした

リアルが忙しくて、とてもとてもかいている余裕がありませんでした

本当に申し訳ありませんでした

これからは少し余裕が出てきたので、ちょっとづつではございますが投稿して行こうと思います

御見苦しいとは思いますが、よろしくおねがいます

反省会とお詫び (ここまで読んでくれた人用)

作者です

先ずはじめに・・・

みなさん、すいませんでした

感想等で、様々なご指摘がありますが、それだけでも感謝です

本当にありがとうございます

煙管の件ですが、自分が好きな漫画でよく出てきたので、そっちの方がカッコいいかなあと思い描きました
実際、自分でも解ってたんですが(この辺はたちが悪く、詰めの甘い所)、どうもうまく纏まらず、この件がおざなりというか、流れで行ってました
決して料理を馬鹿にしているわけではありません、自分もよくするの
で解ってるつもりです

作品の中で、なんとかやめる方向にしていきますので、なにとぞご理解の程を宜しく願います

そして、料理等の組み合わせの件ですが・・・

こちらは、自分の含め知り合い等に聞き込んでから書いて行きますので、『これはちょっと・・・』等
と思うかもしれませんが、成るべく変なのは避けて行こうと思います
こちらにも、なにとぞご理解の程宜しくお願いします

長くなりましたが、誤字等も目立つので読みにくいとは思いますが

なんとか頑張つて書いて行きますので、今後とも宜しく願います

連合と英雄と迫る良い香り

SIDE：華琳

「はあ、麗羽もあそこまでくると、清々しいわね」

私は今、軍議という名の連絡会に出席してきた所である

アレを軍議と呼ぶのは私のありとあやゆる本能が拒絶をしめしている
何アレ！？、私塾で組の長を決めるんじゃないのよ！！！？

横を見ると、同席していた秋蘭も訝しげな顔をしている

この子にこんな顔をさせるなんて。麗羽、ある意味スゴいわよ？

しかし、収穫がなかったと言えば嘘になる

これから私の覇道を阻む者、阻む可能性のある者に会えたのだから

先ずは、“孫策”

先代の母：孫堅の意思を継ぎ、袁術の客将にあまんじてはいるが、

彼女の武、王としての才覚、気質、

全てにおいて最高水準に達している

一言、“暗愚な猿に飢えた虎を飼う事など未来永劫ありえない”に
つきる

今は唯、目の前の主に尻尾を振っているが、彼女の目はその喉笛に
咬みつく時期を伺ってるに過ぎない

そう、まさに“虎”視淡々とね

軍師：周瑜。孫呉の知囊、知の象徴

彼女の考える策は美しいの一言に尽きる

桂花の報告を聞くに、一見冷酷無比に観える策も一つ一つが利に適
い、緻密な計算にもと効果的な打撃を与えている

また主である孫策とは『断金の交わり』と呼ばれるほどの付き合いで、孫策の右腕は彼女以外ありえないわね

宿将：黄蓋

先代：孫堅からの家臣で、孫呉の精神的支柱を担う人物

私の治める北方にも呼び声高いその弓術は目を見張るものがあると聞く

また用兵術も、堅実かと思いきや大胆と幅の広さを見せる。流石歴戦の雄である

孫策の妹達、他の将もとても優秀と聞く

彼女と彼女が率いる将、兵達が私の前に展開する。想像するだけで、この胸の高鳴りは強くなる

楽しみにしてるわ、孫策

そして、もう一人・・・“劉備”

黄巾族が台頭する最中、彼女達も其の芽を表した

善と徳を掲げ、義勇軍を指揮して功績を積み上げて行った

今は平原で相をしているらしいが、劉備もこのままでは終わる逸材ではない

劉備に従う家臣もまた、終わらないと示す理由の一つである

劉備と姉妹の契りを交わしている、“関羽”“張飛”の二人

軍師を務める“諸葛亮”“鳳統”

軍師の二人はあの高名な水鏡塾の門下生で、長である水鏡曰く、

『孔明を伏竜、土元を鳳雛とするならば、どちらかを得れば天下を採れる』

と言わしめたほどの才覚を持つ者たちである

私が目をつけた時には、既に旅に出た後だったので後悔だった記憶を今でも思い出す

そして、末の妹の“張飛”

見掛けこそ幼子だが、丈八蛇棒を手に万夫不当の働きをする猛将である

最後に私が目をつけ、見惚れる程の人物。それが“関羽”である

その美しい容姿、黒髪。

私の五感全てが告げてくる、『彼女がほしい、どうしても欲しい』

容姿も然ることながら武勇も目を見張るものがある

劉備と会う前は、『黒髪の山賊狩り』と呼ばれ、族共の恐怖をほしいままにし、黄巾族の大軍を前に一步も引かないその勇猛さと将としての気質。素晴らしいの一言に尽きる

劉備、あなたとはまだ話した事はないけど是ほどの者達を従わしているあなたはどのような人物かしら？

いづれ私の前に立ちふさがる事をたのしみに行っているわ

連絡会の決定により、今泗水関を劉備軍が攻めている

この戦いまだ始まったばかり。どのように転がって行くか楽しみで

しょうがないわ

それにしても、あいつ・・・・・・・・・・遅いわね

S I D E E N D

連合が関に攻めかかっている時、洛陽を目指す人物がいた

どっかの軍の遅れた兵か？いや、ちがう

いまから戦場に向かおうとするその人物は、あきらかに場違いな格好とモノを引き連れている

「意外と遠いな。まあいい、コイツを試させてくれる機会をくれた華琳に感謝しないとな」

そう言つと、彼は再び歩き出す。後ろに控える大きな“屋台”を引っ張りながら

連合と英雄と迫る良い香り（後書き）

反省会

皆さん、先ずは一言

ありがとうございます

感想に様々な御意見等を頂き、本当に感謝です

皆様の意見を元に調整をしつつ、あきらめずに書いて行こうと思
います

今回は九割方、人物紹介になってしまいました
意外と書く事が多く、自分の力量ではこれ位にし
か纏められません
した

孫呉の事をもっと書きたかったんですが（特に祭
さんの事）、これ
以上書いたら流石にマズイと思い、このよ
うな事になりました

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願
いします

場違い？そりゃそうだ、だって……ねえ？

SIDE：軍侍

「お疲れ様です」

「なんだ、貴様？」

「自分は陳留から曹操様に荷駄を持ってきたものです、これを曹操様に渡して確認をお願いします」

「……ちょっと待ってる」

なんだあのキンキラキンの鎧は？趣味がどうここの問題じゃねえな

「店長殿！！」

「おお、牛金さん」

「おお、じゃなですよ！！なにしてるんですか！？」

「孟徳様に頼まれてな。兵達に飯を作りに来たんだよ、これ承諾書。ちゃんと許可を貰ってるから」

「はあ。確認してきますから、着いて来てください」
完全に呆れてるな？そう思う気持ちもわからなくてもないが

牛金さんについていき曹操軍陣営の入り口に屋台を止め、一息ついてると

華「やっと来たわね」

「ん、おお〜う」

華「遅かったわね？もう少し早く着くと思ってたわ」

「色々あつたんだよ、個人的な用でな」

流琉が最後の最後までぐずっていて、離してくれなかったのが始まりでそこから星がからかい始めてからが大変で宥めるのに苦労したもんだ

華「そう、まあいいわ。早速準備にと」
「貴様！ここで何をしておる！！」
「はあ〜。」

春蘭？今私が話をしてるのよ、少し黙っててくれるかしら？」

春「しかし、華琳様！なにうえこやつが戦場に来ておるのですか！？」

華「あなた達にも説明して無かったわね、ごめんなさいね。そうね、そこのあなた！！」

「はっ！」「臣を全員呼んでちょうだい」

兵「承知！！」

「俺はどうしてればいい？」

華「あなたは準備に入ってちょうだい」

桂「華琳さま、どういふ状況なんですか？」

華「説明するわ。」

軍侍がね、私達を兵糧を支援したいと言ってきたのよ。

自分は料理を作るしかできないから、兵達や私達に食事ぐらいは良い物を食べてほしいと懇願して　きたのよ
「

秋「そうなのか？」

「まあな、戦場という特殊なところは解ってるさ。

そんなところで飯ぐらいはさうまいもんで明るくしてほくてな。

迷惑なのは解ってる、ただ俺に作らせてくれないか？

勿論、自分の身は自分で守る。だから、俺にやらせてくれ!!!」

華「みんなどうかしら？」

春「こればかりは承諾しかねます」

将達「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

凧「華琳様、いいと思います」

真桜、沙和「「凧ぢゃん!」?」

凧「店長殿は店で我々の我が侷な注文を嫌な顔せずにつけてくれます
それに私達新兵隊は店長殿に色々とお世話になっています。訓

練終了後に差し入れを頂いたり、

訓練の助言をくれたりと。

ですから、私からもお願いします、春蘭様!!!!」

真「春蘭様、うちからも頼みます

店長は色々とカラクリの案をくれて、新しい発明の手助けをしてもらってるんや」

沙「沙和もおしゃれの手助けをしてもらってるの」

凧、真、沙「」だから、お願いします」」

秋「姉者、よいではないか？本人も身は自分で守ると言っておるのだから」

春「うううう、し、しかし・・・」

桂「まあ、別に良いんじゃない。私達の邪魔さえしなければ」

春「桂花までか!？ううっ、これでは私だけ悪者みたいではありません」

華「そうじゃないわ、春蘭。あなたが言ってる事は至極まっとうな事よ

優秀な部下を持って、わたしも嬉しいわ

ただね？彼はもうここまで来てしまってるの、あなた達に伝えなかつた事は私も謝るわ」

そう言うと華琳は頭を下げた

その姿に一同、驚きの表情に変わる

華「私はこの戦場という限られた状況、限られた食材で彼が何を作るか楽しみでしかたがないの

それη「華琳」、なに軍侍？」

「春蘭、さつきも言ったが我が俣を言っているのは重々承知している
ただ戦いで疲れたお前達に俺の飯を食ってほしいんだ、頼む、このとーりだ」

ここまでできたら、土下座でも何でもしてやる

春「・・・・・・・・・・・・・・・・る」

「え？」

春「町に帰ったら飲み放題、食い放題で許してやると言ったんだ！
！！」

「おおぅ！！！！」

春「フンツ！！いくぞ、秋蘭」

ドストロスとまるで怪獣のような足音を立てながら、出て行った

華「よかったわね。責任重大よ、軍侍？」

桂「重大すぎて潰れて死ねばいいのに」

余計なプレッシャーをあたえるなよ、それと猫耳、死ねばいいのにとは何だ、死ねばいいのにとは！？

それでも確かに華琳の言う通りでもある、あんなだけの事を春蘭に言
ったのだから気合を入れ直さないとな

おれは自分の頬をパンツパンツと打ち、白衣に着替える。
おれの戦闘服、頭に布を巻き、料理作業に取り掛かるのであった

場違い？そりゃそうだ、だって………ねえ？（後書き）

反省会

いつも、ありがとうございます

今回はどのようにして反董卓連合と繋げようか迷った結果こうなりました

作中の理由についても都合主義なのは重々承知ですが、これしか浮かばなかったのでこうなりました

スイマセン、スイマセン

石はやめてください、痛いですから 痛い、痛い

次回は久々に料理を作ります

頑張って書きます

御見苦しいとは思いますが、何卒宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0022u/>

夢はでっかく全国展開、かなあ

2012年1月12日23時59分発行